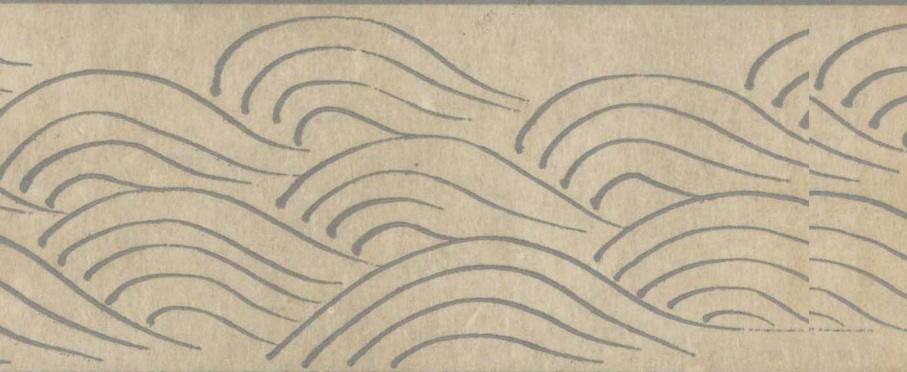


熊谷次郎

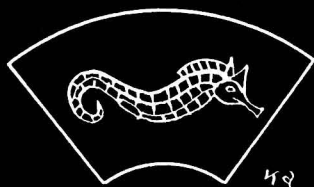
上卷



熊谷次郎

上卷

富田常雄



新潮社版

熊谷次郎 (上卷)

昭和三十六年四月十一日印刷

昭和三十六年四月十五日発行

著者 富田常雄

発行者 佐藤亮一

印刷所 図書印刷株式会社

製本 神田加藤製本所

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(341)七一一一(代)

振替東京八〇八番

定価 三二〇円

乱丁本はお取換えいたしません。

目次

花	な	ら	ば	セ
千			景	六
丈	く	ら	べ	三
二	番		目	三
都	ぞ	春		七
か	わ	り	は	代	わ
り				六
浦			島	三
秋	出	水		三

野望	……	九
鞍馬の稚児	……	二〇
恋すてふ	……	二三
毒舌	……	二五
旅路の果て	……	二七
蛭が小島	……	二九
苦い水	……	三一
炎の柑塙	……	三三
鹿谷前後	……	三五
若駒	……	三六
恋のいのち	……	三六

まぼろし	三三七
山木判官	三三四
文覚・頼朝	三三七
霜 朽	三三三
弥生異変	三三二
池中の竜	三三二
草 いきれ	三三〇
運命への賭	二九九
立 待 月	三〇七
白 鳩	三三八
直実忠勤	三三九

装幀・挿絵
風間 完

熊谷次郎

（上卷）

花ならば

草の穂を渡る風は秋を覚えさせたが、午下りの陽は熱く、陽炎がもえて、荒川の堤は草いきれで、むっとするようだった。

その丈高い草のなかに坐って、水の干あがった広い河原の対岸を、雑草の間から眺めても、近い比企の丘さえ見えず、まして、秩父の連峰は陽炎の中に融けて消え、見るよすがとてなかった。

次郎は身をすり寄せるようにして並んで坐った女の匂いがやり切れなかった。女の香というものは母以外には知らぬ、かう、トクダリ支は戸惑って、しきりに、草の茎を掴

しは捻りつぶした。

「なるばかりじゃ」

と、小袖姿の由白「言った。やがて、三十に手が届こうという、新居の大正「善作の後家で、昔は遊女をしていたと言われ、見るから「仇っぽい女だった。善作は新居の駅馬を司った男で、女を何処でひろって来たのか知れたものではなかった。「から、善作の死後は野良仕事もせず

羽の矢を立てたものらしい。
粗末な水干に、よれよれになった侍烏帽子をかぶった次郎は青臭くなった自分の掌を嗅いでから、黙って、草の葉にこすりつけた。

「臭かろうに」

女は擲揄するように笑った。

「おぬしの匂いより、よほど、いい匂いだ」

「ふふふ、嘘を言うて。その実、悪くないのである」

「嘘なものか」

「ほれ、赤くなつた」

女に言われて、次郎は一層赤くなつた。

いやな奴だと思ひ、いやな匂いだと思ひながら、どうして逃げ出さないのか、自分でも審しかつた。

「小若は初冠（元服）をすましたのであろうか」

「うむ」

と、次郎は頷いた。

兄の直正を大若と呼び、彼のことを小若と呼ぶのはこの

榛沢の人々の習慣だつた。

「その時に女と添臥ししてか」

「女とな」

豊かに肥つた次郎は眼を丸くした。

「初冠の式の後では好みの娘と添臥しするのが習いじゃ」

「何処の」

「尊い身分の男は、公卿の娘と式の後で添臥するのが、

男になつた証じゃ

「わしは尊い身分ではないから、そんな事はせぬ」

次郎はいよいよ赤くなつた。

「のう、大人になつた証は欲しくないか、小若」

女は、いきなり体をすり付けて来た。

由良のむせかえる様な肌の香が次郎の鼻をくすぐり、彼は眩暈がした。決して、暑さのせいでもなく、草いきれのためでもなかつた。

「大人になぞ、なりたくあるものか」

「ふゝ、嘘である」

「都の公卿殿上人は知らぬ。武蔵の国には、添臥しなぞの習いはないわい」

「小若が知らぬからじゃ」

「知らぬ方がよい」

「知つて、大人になつた方が一層にいいではないか」

「いやだ」

と、次郎は体を固くした。

体は立派に成長していたし、女を知ることが恐ろしいとは思わないが、自分の汚れぬ童貞は、己れの好ましいと思う女に与えたかつた。妻として娶るに足る娘で、こんな、年古りた毒の花のような女に童貞を破らせてはならないという誇りが働いた。

「わしは鎮守府將軍、平貞盛の子孫で、熊谷の丹治次郎直実だ」

「ほゝ、それが、どうしたえ」

「つまり、立派な武士だ」

「それならば、なお、早よう大人になりなされ」

「いやだ。おぬしのような女は嫌いだ」

「どれ、どれ」

と、由良はいよいよ、すり寄ると、彼の太い胴に片手を廻して

「わたしが嫌いか、どうか、見て進ぜよう」

次郎は、そんな事をされては堪らぬと思ひ、身をよじつた。

「嫌いだつ」

「ほゝほゝ、どうやら、嘘らしい」

「黙れ」

「さ、由良が小若を大人にしてあげよう程にの言葉と一緒に女は崩れるように身を投げかけ、次郎の逞しい体にしがみついた。

「よ、よ、止せ」

感情が極まると吃る癖の出る次郎直実は狼狽して声を慄かせた。

「怖がらずとも」

もはや、次郎の理性ではとても、防ぎ切れなかつた。円熟した女の、臆面もない技巧と情痴は到底、十五歳の彼の抵抗を許すものではない。

「うわあつ」

次郎は大声で喚くと、四辺の草の穂を体で飛び散らしながら跳りあがった。すさまじい体力だった。

女はあきれて、彼を見上げたが、若者の初心さは一層に彼女の情をそそつたらしく

「さ、もう一度ここへ」

と、誘うように笑って見せた。

だが、その時、次郎は荒川の土手を狂奔して来る一頭の馬を見つけた。

午さがりの、焼けるような暑さのためか、荒川堤には人っ子ひとり見えなかったが、奔馬は留め手が無いのに、かえって、腹を立てたかのように黄色く土埃を巻きあげて、ひた走りに、次郎の方へ向かって来た。

小荷駄に使う結び鞍の右側に人間とおほしい小さいものがしがみ付いている。紅の塊のようにも見える。

「こやつ」

次郎は堤の真ん中に躍り出ると大手を拡げた。

もし、とまらなかつたら、馬を撲り倒す心算だった。

奔馬は童顔ながら水干姿の逞しく豊かな相手の大手を拡げた姿を見ると、前肢を突っ張って、己れの勢いをそいでから、次郎の横をすり抜けようとした。

「どう」

肥っているのに敏捷な動作で、次郎は馬の轡にかけた手綱に飛びつくと、そのまま、びたりと抑えて、テコでも動かなかつた。もがいたが、馬の方で顔負けして、すさまじ

い鼻息を空に吹きあげただけで、奔馬はすっかりおとなしくなった。

結び鞍の右側に板を渡して、横乗りしていたらしい少女が、しっかりと木の結び目を掴んだまま気絶していた。

「おお、よくぞ、落ちずにいたなあ」

思わず、その姿を見て次郎は口走ったが、不憫さに忽ち胸が一ぱいになった。

「新居の婆」

と、彼は大声で由良を呼んだ。

「由良を婆とな」

仕方なく草の間から身を起こして、由良はふくれ面を向けた。

「許せ。この馬の口を持っていてくれ」

「暴れぬか」

「疲れて暴れる力はあるまい」

「大丈夫かえ」

由良はこわごわ近づいて馬の口を取った。

「駅を司っていた善作の後家のくせに馬が怖いか」

次郎はそう言いながら、結び鞍にしがみついている少女の体に手をかけた。彼の力で抱きしめたら潰れるほどにも思われる軟らかい体である。

市女笠も虫の垂布も何処かへ飛んでしまったのか、額に垂れさがった「めざし」と言われるおかげの髪が乱れ、眉引して、頬に紅をさして化粧し、ぶくれの顔の蒼ざめ

ているのが、くれないの打衣が華やかであるだけに、一層に痛々しく見えた。

歳は七つか、八つであらう。

羽毛のように軽い体を楽に抱き下ろすつもりだった次郎は、意外にも、少女の両手が鞍の結び目の縄をしっかり掴んで放さないのに眼を丸くした。

「可哀そうに、必死に掴んでいたのだな」

次郎は憐れさに胸を一ぱいにして、少女の白く、軟らかな指を一つ一つ縄から放してやった。掌には血がにじんで居た。

結び鞍から軽々と抱きおろすと、彼は馬の手綱を持った由良を見た。

「婆、馬も連れて来い」

「えい、又、婆なぞと。馬をどこへ連れて行くのかえ」

「水を飲ませ、足も冷やしてやるのだ」

「このわる馬をか」

「馬を怒らせたのは、大方、人間かも知れぬから、馬ばかりわるく言うな」

言いながら、次郎は土手を降り、細い流れの幾筋かが光っている河原を渡って行った。

「なんと、小若、その娘は死んでいるかも知れぬぞ」

「うるさい。このように体がぬくいわ。死なせてたまるか」

「小若はうれしそうな」

「なにを言うか。助けてやらねばならぬ。うるさい婆だ」
「又……ええい。由良と呼びなされ」

次郎は答えず、流れに近づくと、娘を膝にのせ、ふところの布を出して水にひたすと、その額に当てた。

「小若、そんな事をせずに口に水を含んで、吹きかけてやんなされ」

「うむ」

「その方が早いが」

「うむ」

次郎はしぶしぶ、娘を石と草の間におろし、自分の口に水を含んで、思いきって、その顔に吹きつけようとしたが、美しい顔に気おくれがして、不覚にも、ごくりと自分で飲んでしまった。

「小若、己れが飲んで役はたたぬえ」

「判っているわ」

次郎は又、口に水を含み、今度は眼をつぶって、娘の頭に吹きつけた。

「ついでに、水も飲ましてやりなされ」

流れに入って水を飲んでいる馬をそのままにして、由良はしきりに干渉した。

「うむ」

次郎はいささか極りがわるかったが、もう一度、流れに首を突っ込んで水を呑むと、片手で娘の首を抱え、おそるおそる口を近づけた。

口紅の匂いか、なにやら、香ぐわしかったが、小さな唇はやわらかく熱く、しかも、歯を喰いしばっているの、口移しは容易でなかったが、どうやら、少しは喉に通つたらしく、娘が微かにむせた。

次郎は心臓の鼓動がおそろしく早くなり、額には汗の粒がにじんだ。危急の場合とは言え、女の唇に己れの唇を触れたのは生まれて初めてだったからである。

娘は嘘のように、ぼつちりと眼をあけた。黒眼勝ちの大きな眼だった。

驚いた風もなく、しげしげと次郎を仰いで

「ここは何処」

と、不思議そうに訊いた。

次郎は娘が生き生きと正氣をとり戻したのが嬉しく

「ここはな、武蔵の国榛沢の熊谷だ。お身のいるのは荒川の河原の中だ。気がついてよかったな」

「そう」

頷いて、わずかに身を起こすようにして、娘は眼を細めて、広い河原を見まわした。

「どうして、妾はこのような処に来たのである」

「お身を乗せていた馬が」

次郎の言葉をさえぎるようにして、娘は由良に手綱を取られて、流れに立っている馬を見た。

「あ、あの馬じゃ、妾が鞍の上で眠りなつた時、いきなり疾風のように駆け出してしもうて、落とされまいと鞍にし

がみついたのは覚えておれど、あとは知らぬ」

「それは何処であったな」

「知らぬ」

「いずこから来られた」

「都から」

「京かな」

「あい」

「それは又、遠い旅だな」

由良は二人の間答を聴いていたが、もどかしそうに

「小若、何処の誰の娘か訊かぬか。大切なことではないか」

「うむ、判っている」

次郎は大きく頷いたが、そんな事はどうでもいような気がした。

「妾は右少弁平時定の娘、八重姫。助けて下されたお礼を申します」

娘は自分から名乗って、さかしらに礼を言った。

「して、なんのために武蔵の国なぞに来られまいたな」

と、由良が引き取って訊いた。

「知りませぬ」

「どなたと一緒に来られましたな」

「供の者三人、一人は雑司女の福でおじやりまする」

「して、これから、どこへ」

「それも知りませぬ」

「母さまは」

「都に」

八重姫は悲しげに答えた。

「婆、いい加減にしろ。役人が調べるように、くどくど」

次郎は由良を叱りつけた。

「ここは陽が照りつける。毒だ。必ず、迎えが来るであろうから、それまで、わしの屋形にいては」

と、次郎は娘の顔を覗くようにして訊いた。

「行っても、大事はないかえ」

「おお、なんの大事がある、さ」

次郎は娘を促したが、相手は元氣よく起とうとして、ひよろりと、よろめいた。

「疲れたのだな、わしに背負われるか」

素直に頷いて、八重姫はしゃがんだ次郎の大きな背につかまったが、その小さな体を軽々と背中にした時、次郎はわれにも無く上気した。この様な都育ちの少女を全く知らなかったし、背負うなぞ、生まれて初めての事だったからである。

「えへん」

と彼は咳ばらいをして一足出たが、振りかえって

「婆、その馬を屋形の厩へひいて行って、権太に飼葉をつ

けさせるがよい」

由良は馬の手綱をひきながら

「小若、とうとう、わたしを婆にしたな。どこに、このよ
うな美しく若い婆があるものか」

頬をふくらして言い、忌々しそうに尻込みする馬を叱りつけた。

「このじゃじゃ馬め。早く歩かんかい」

次郎は面映ゆかったが、また、極めて得意でもあった。

娘の体温がぬくぬくと彼の背に染みてくる。額には玉の汗がふき出したが、彼は一向に暑さを感じなかった。

荒川の堤から凡そ、十丁、森に囲まれ、小さな空濠をめぐらした屋形は午下がりの事でひっそりしていた。

草葺の棟には菖蒲や、万年草が植えてあり、四尺もある厚葺だったが、湖萱にシノという太い芦を交せて葺いてあ

って、見るからにどっしりしていた。この辺では山と言っている森の中に、熊谷一族は屋形を中心に小さな家を建て

て、かこむようにして暮らしていた。

間口十三間の棟をめずらしそうに見上げて

「これが、屋形となあ」

と、八重姫が言った。

「おお、そうよ」

「都では見たことがありますね」

「そうであるう」

次郎が頷いた時、華やかな八重姫の姿を見つけた家人達
が家々から、もの珍しそうに集まって来た。

土間に入ろうとすると、出居をめぐる広縁に寝そべって

いた兄の直正が半身を起こして

「次郎、どこから、そのような娘をひろって来た。この暑

いに

と、眼を光らせながら皮肉な笑いを浮かべた。

「おお、よ、それがな、兄者、馬に結び鞍をつけて旅して
いたのが、暴れられて、荒川の堤をまっしぐらに駆けて来
た」

次郎は頬をほてらせて説明した。

「ふむ。何処からよ」

「判らぬ。大麻生の方からだが」

「化け物ではあるまいな」

直正は皮肉だった。

「なんでよ、兄者」

次郎はむっとしながらも、土間に入ると、出居の大黒柱
に近く八重姫を下ろした。

「顔が白くて、じゃらじゃらしてよ、狐が化けたのでもあ
ろうかい」

と、直正は縁から大声で擲諭した。

「なんの、都の右少弁、平時定殿の姫だ。狐でたまるもの
か」

次郎は肚を立てた。

「次郎、尻を撫でて見い。尻尾があるかも知れぬぞ」

「ええい、やかましいわ。兄者」

いよいよ、次郎は赤くなって怒鳴りかえしたが、母の小
松は兄弟の会話を聞いていて、事情を察したのか、上り框
に腰をかけた八重姫の草履の緒を解いてやりながら

「それでも、よく、落ちずにのう。未だ、いとけない身で」
と、労わった。

「お世話をかけまする」

深窓に育った娘らしく、八重姫は礼を忘れなかった。

「武蔵の国は都とは違つて、むさ苦しいなれど、ゆっくり、
お寛ぎなされ。して、次郎、定めし、お連れの方々が探し
ておられるであろうな」

「うむ、だが、一筋道よ。ここを探すに骨は折れまい。ど
れ、わしは馬を見てやろうか」

八重姫を母に渡してしまふと、次郎は掌中の珠を奪われ
たような、もの足りなさを覚えたが、うっかり、娘なぞの
側にいると、ひねくれ者の兄が何を言い出すか知れなかつ
た。

病身な直正は彼と性格が反対だった。

厩へ行くと、馬飼いの権太が、由良から渡された先刻の
馬の体をわらで擦っていた。権太は次郎より二つ下であつ
た。

「小若、こんな、牝のよぼよぼ馬だったから、あの娘は助
かったが、若駒だったら落とされていきますな。歯も抜けて
いるし、この毛艶は、ひどく働かしたものらしいが、永く
生きませぬな」

「幾つぐらいであらう」

次郎は鼻面を撫ぜながら訊いた。

「十三、四」

「歳がいもなく暴れたな、こやつ」

「汗で風邪でもひいては不憫ゆえ、まあ、こすってやっているが、小若、あの女は見たこともない美しい娘だな。わしは眼がくらんだ」

権太は無邪気で正直だった。

「眼がくらんだか。はゝはゝ」

初めて会った娘なのに、次郎は妹でも褒められているような喜びを覚えた。

「小若が背負って入って来た時には、あの着物の紅が眼にちかちかしてなあ、それに、あんな白い顔はこの辺で見たことがないから、俺は仰天した」

権太は次郎に対して、兄弟か、仲間のような口の利き方をした。

「権太、都の姫というのは、みな、あのように美しいぞ」

「小若は都を知らぬではないか」

「うむ、だろうと思うのよ」

「なんのことだ」

「花ならば、なんであろうな、あの娘は」

次郎は夢を見るような眼をした。

「花ならば」

口の中で呟いて

「ひな菊かな」

「着ているのが赤いからか」

「ひな菊は愛らしい」

そう言った時、由良が近づいて

「小若、花ならば、ひな菊とな」

と、椰揄うように言った。

「そうよ」

次郎は恥しそうに眼を瞬いた。

「ふゝふゝ、歳もゆかぬのに、いやらしいひな菊じゃ、じやらじやらとして、こちらの野良で働く娘の方がよほど上であろうが」

由良は吐き出すように言った。

「あのような花は大きくなると、みな、毒の花になるばかりじゃ」

「嘘をつけ」

次郎は眼を剝いた。

「ほんとじゃ、美しいと見るのは、小若に淫らかな心があるからよ。小さいながら、向うも毒の花だから、小若に淫らかな心をおこさせるのが巧みなのじゃ」

「こやつ」

言ったかと思うと、次郎直実は由良の首を両の掌に挟んで、ぐいと吊りあげた。地上二尺の宙吊りだった。

「ううっ、助けて」

由良は悲鳴をあげたが、足でもがくと一層に苦しくなるので、ぐったりと吊るされて居た。

「言わぬか。もう」

「い、言わぬ」